

3. 事業概要

(1) 常設展(展示室A, B)

常設展示室は全体で5室の構成となっている。第1室は「山梨の文学風土」と「樋口一葉」、第2室は「山梨出身ゆかりの作家と作品」、第3室は芥川龍之介、第4室は飯田蛇笏・飯田龍太記念室、第5室は山梨出身・ゆかりの作家104名をジャンルごとに年2回入れ替えて紹介している。

常設展示室の第1～4室は、下記のとおり春夏秋冬にあわせて年4回、一部の資料の入れ替えを行い、第1室の一面にコーナーを設け、期間限定で資料を公開した。また、平成31年3月9日(土)～6月2日(日)の間、全国文学館協議会共同展示「3.11文学館からのメッセージ天災地変と文学」として第3室で「吉田初三郎 画「関東震災全地域鳥瞰図絵」を読む」の展示を行った。

以下の資料一覧には、平成30年3月13日(火)～平成31年3月10日(日)の間、常設展示室に出品した資料すべてを提示した。

第1室

期間限定公開

◆春の常設展 竹中英太郎・竹中労 3/13(火)～6/3(日)

【竹中英太郎】 *は「湯村の杜竹中英太郎記念館」所蔵

- 竹中英太郎「沖縄の舞姫」a 日本禁歌集三「海のチンポラー」レコード及びジャケット原画 *
- 竹中英太郎「沖縄の舞姫」b「沖縄一祭り・うた・放浪芸」レコード及びジャケット原画 *
- レコードジャケット「日本禁歌集三 海のチンポラー」1970(昭和45)年 URCレコード
ディレクター 竹中労・上原直彦 ジャケットデザイン 竹中英太郎 *
- レコードジャケット「沖縄一祭り・歌・放浪芸」1975(昭和50)年 CBSソニー
構成・解説 竹中労・照屋林助 ジャケットデザイン 竹中英太郎 *
- 竹中英太郎「無頼と荊冠」(竹中労著 1973年9月 三笠書房)カバー原画 *
- 竹中英太郎「悪夢」(作 江戸川乱歩)挿画(「新青年」1929年1月掲載) *
- 竹中英太郎「ココナツの實」(作 夢野久作)挿画(「新青年」1931年4月掲載) *
- 竹中英太郎「芙蓉屋敷の秘密」(作 横溝正史)挿画(「新青年」1930年6月掲載) *
- 竹中英太郎「盲獣」(作 江戸川乱歩)挿画(「朝日」1932年1月掲載) *
- 江戸川乱歩『孤島の鬼』1930(昭和5)年 改造社 装幀 竹中英太郎 *
- 甲賀三郎『神木の空洞』1930(昭和5)年 先進社 装幀 竹中英太郎 *
- 下村千秋『天国の記録』1931(昭和6)年 中央公論社 装幀 竹中英太郎 *
- 「クラク」第6巻第11号 1927(昭和2)年11月 大下宇陀児「盲地獄」掲載
- 「新青年」第9巻第11号 1928(昭和3)年9月 江戸川乱歩「陰獣」第二回掲載
- 「新青年」第16巻第2号 1935(昭和10)年2月 横溝正史「鬼火」前編掲載
- 「新青年」第16巻第4号 1935(昭和10)年3月 横溝正史「鬼火」後編掲載
- 『名作挿画全集』第4巻 1935(昭和10)年 平凡社
- 竹中労編『百怪、我が腸二入ル』1990(平成2)年8月 三一書房

【竹中労】

- 竹中労「父・竹中英太郎のこと」原稿
- 竹中労、辻淳、大島渚、加太こうじ寄書き「夢よ 少年懐古 浅草の灯よ チャンバラ時よ」色紙
- 竹中労『エライ人を斬る』1971(昭和46)年1月 三一書房 竹中英太郎装幀
- 竹中労『無頼と荊冠』1973(昭和48)年9月 三笠書房 竹中英太郎装幀
- 竹中労『芸能の論理』1982(昭和57)年9月 幸洋出版株式会社 竹中英太郎装幀
- 竹中労『仮面を剥ぐ』1983(昭和58)年2月 幸洋出版株式会社 竹中英太郎装幀
- 竹中労『左右を斬る』1983(昭和58)年6月 幸洋出版株式会社 竹中英太郎装幀
- 竹中労『にっぽん情哥行』1986(昭和61)年1月 ミュージック・マガジン 竹中英太郎装幀
- 竹中労『呼び屋』1966(昭和41)年7月 弘文堂 井上光晴への献呈本
- 竹中労『タレント帝国』1968(昭和43)年7月 現代書房
- 竹中労『聞書アラカン一代＝鞍馬天狗のおじさんは』1976(昭和51)年11月 白川書院
- 竹中労『ルポ・ライター事始』1981(昭和56)年7月 みき書房

◆夏の常設展 高浜虚子と山中湖の虚子山荘 6/5（火）～8/26（日）

高浜虚子「春風や鬪志いだきて丘に立つ」軸装
高浜虚子 賛 近藤浩一路画「霜降れば霜を楯とす法の城」軸装
新蕎麦会 高浜虚子 選句稿 1942（昭和17）年8月22日 個人蔵
高浜虚子「選集を選ミしよりの山の秋」短冊額装
高浜虚子「木蔭へと入れば涼しやそれまでは」短冊
高浜虚子「三省楼酔時 雪を省み花を省み春の富士」短冊
新蕎麦会選句稿綴り
柏木白雨「新蕎麦会句会記」1942（昭和17）年8月22日
「山梨ほとゝぎす俳句大会」チラシ 1952（昭和27）年7月25日
「新蕎麦会師走句稿」1955（昭和30）年12月17日
柏木白雨「夕富士のほの紫や花の上」短冊

◆秋の常設展 小説家・熊王徳平 8/28（火）～12/2（日）

熊王徳平肖像写真 撮影 木村伊兵衛 個人蔵
熊王徳平「蝸牛角振る方や虹の橋」色紙 個人蔵
熊王徳平「紙と語る」原稿
熊王徳平 俳句・短歌草稿
映画「狐と狸」ポスター 1959（昭和34）年 東宝
太宰治 熊王徳平宛葉書 1944（昭和19）年9月10日
熊王徳平「その墓に酒打ちかけよ桜桃忌」色紙

◆冬の常設展 小林一三と文芸 12/4（火）～3/10（日）

小林一三 齋藤雅一郎宛書簡 年不明12月2日 個人蔵
小林一三 齋藤雅一郎宛葉書 1936（昭和11）年1月4日 個人蔵
小林一三『曾根崎艶話』1916（大正5）年1月 初山書店 個人蔵
「宝塚 少女歌劇」第22脚本集 1921（大正10）年7月 個人蔵
「宝塚 少女歌劇」第7脚本集 1917（大正6）年10月 個人蔵
「歌劇」第32号 1922（大正11）年11月 個人蔵
「歌劇」第39号 1923（大正12）年6月 個人蔵
「歌劇」第53号 1924（大正13）年8月 個人蔵
小林一三『雅俗山荘漫筆』第1～第4 1932年6月～1933年9月
小林一三 石井秀平宛書簡 1942（昭和17）年4月28日 寄託資料
「中央公論」第53年第9号 1938（昭和13）年9月
小林一三『芝居ざんげ』1942（昭和17）年11月 三田文学出版部
「中央公論」第56年第5号 1941（昭和16）年5月
「美術工芸」第139号 1950（昭和25）年5月 個人蔵
小林一三『寶塚漫筆』1955（昭和30）年6月 実業之日本社 個人蔵
小林一三『逸山未定稿』『逸翁鶏鳴集』1963（昭和38）年1月 逸翁美術館 個人蔵

山梨の文学風土

甲斐のうた（パネル展示）

酒折の宮／塩の山・差出の磯／都留の郡／甲斐の牧

甲州の紀行文

深草元政『身延道の記』元禄17年刊
荻生徂徠『徂徠集』卷之十五 元文元年序文「峡中紀行」収録
賀茂季鷹『富士日記』文政6年刊

甲府学問所 徽典館

乙骨耐軒「徽典館学頭勤務割」
乙骨耐軒「維心亭齋詩」三集上・下

国学を学んだ人々

本居宣長点 辻守瓶「思往事」1789年頃
本居宣長点 辻守瓶「万葉の集見ずして」江戸時代
本居宣長点 辻守瓶「詠松浦佐用嬪」
本居宣長点 辻守瓶「春彦ぬしのはじめてとひ給へるときによめる

樋口一葉（ひぐち いちよう）

樋口一葉 感想・聞書9（残簡その三）卷子
「寄紅葉恋」（数詠補遺）1894（明治27）年11月22日 軸装
樋口一葉 古屋家宛書簡 1890（明治23）年10月13日
馬場孤蝶「一葉の住みし町なり夕時雨」軸装
幸田露伴「一葉女史碑」碑文下書原稿
愛用の筆立て
新五千円札（A000006A番）
一葉愛用の筆立て
一葉愛用の髪飾り・櫛・こうがい
一葉旧蔵 短冊ばさみ
写真パネル 母多喜・奈津（7歳頃）・姉ふじ・妹くに 本郷6丁目5番屋敷時代
写真パネル 左から次兄・虎之助、父・則義、長兄・泉太郎
樋口虎之助作 薩摩焼絵付皿
写真パネル 萩の舎集合写真
写真パネル 半井桃水
写真パネル 竹内桂舟 画「うもれ木」第7回挿絵
写真パネル 文学界同人
「武蔵野」第1輯（復刻）1892（明治25）年3月 今古堂
樋口一葉「たけくらべ」原稿（複製）
「文学界」1895（明治28）年1月（復刻）
樋口一葉「ゆく雲」未定稿（複製）
写真パネル 一葉女史の碑建碑の日 1922（大正11）年10月15日

第2室

井伏鱒二（いぶせ ますじ）

井伏鱒二「はなにあらしのたとへもあるぞさよならだけが人生だ 花発多風雨 人生足別離」軸装
（複製）
井伏鱒二「勸酒」対幅（複製）
井伏鱒二「山みちのかたはらに水たまりあり手洗ふと立てば涙水に落つ」色紙
井伏鱒二「わたくしは平凡な言葉を好きな人間になりたい」額装
井伏鱒二「今宵は仲秋名月初恋を偲ぶ夜」軸装（複製）
井伏鱒二「さびしい庭にまつかさ落ちてとてもお前はねにくうござろ」色紙
写真パネル 1963年4月16日 枳代川の釣行で 井伏鱒二、山角司、飯田龍太、小林富司夫
撮影 宅間正一
井伏鱒二「波高島」原稿（複製）
井伏鱒二「居酒屋風景」原稿
「改造」1932（昭和7）年9月
井伏鱒二「甲斐の黒駒」草稿
井伏鱒二 中込重春宛書簡 1981（昭和56）年6月6日
井伏鱒二「老僕のゐる風景」原稿（複製）
井伏鱒二「子熊のクロ」原稿
井伏鱒二 野上照代宛書簡 1985（昭和60）年8月2日
井伏鱒二「頓生菩提」原稿（複製）
井伏鱒二「旧・笛吹川の趾地」原稿（複製）

井伏鱒二 奥山鬚筆「送状」色紙
井伏鱒二『夜ふけと梅の花』1930(昭和5)年 新潮社
井伏鱒二『黒い雨』1966(昭和41)年10月 新潮社
井伏鱒二『七つの街道』

太宰 治(だざい おさむ)

写真パネル 甲府市水門町(現・朝日1丁目)の石原家玄関横で 1939(昭和14)年元旦
写真パネル 三鷹の古本屋にて 撮影 田村茂
写真パネル 銀座のバー・ルパンにて1946(昭和21)年 撮影 林忠彦
太宰治「陰火」原稿(複製)
太宰治『晩年』1936(昭和11)年6月 砂子屋書房
太宰治 浅見淵宛書簡 1935(昭和10)年11月22日消印(複製)
太宰治「我が名は狭き門の番卒」色紙
太宰治文学碑「富士には月見草がよく似合ふ」表面 拓本軸装
太宰治 井伏鱒二宛書簡 1938(昭和13)年10月25日消印(複製)
太宰治 高田英之助宛書簡 1939(昭和14)年1月17日(複製)
太宰治『右大臣実朝』1939(昭和14)年4月 砂子屋書房
太宰治 井伏鱒二宛書簡 1941(昭和16)年6月25日(複製)
太宰治『富嶽百景』1943(昭和18)年1月 新潮社
太宰治『女生徒』1943(昭和18)年9月 錦城出版社
太宰治 井伏 二宛書簡 1945(昭和20)年8月末(推定)
太宰治「ヴィヨンの妻」原稿(複製)
太宰治『ヴィヨンの妻』1947(昭和22)年8月 筑摩書房
太宰治「人間失格」原稿(複製)原本
太宰治『人間失格』1948(昭和23)年7月 筑摩書房

檀 一雄(だん かずお)

写真パネル 能古島の草庵「月壺洞」にて 1975(昭和50)年
檀一雄画「大木と電柱」水彩
檀一雄「玉きはる命の限り見てしがな青海原の断崖に坐す」一枚物
檀一雄「不思議やな此処にして坪にも足りぬ鎮魂の仮現の憩ひ」一枚物
檀一雄「モガリ笛いく夜もがらせ花に逢はん」色紙
檀一雄「酔余二陶の図」額装
檀一雄「世界のもの憂き町を歩きつめたる悲しき男有り」色紙
檀一雄「痩せ脛の尚よろけ行く秋の風」一枚物
檀一雄「此処二浮足立つた男が一人居て」色紙
檀一雄「女子共八毛梳きてあらむ河明に柳の影もそよぎてあらむよ」色紙
檀一雄「嗚呼何と云う充満した光輝でせう」額装
檀一雄「旅立ち」原稿(複製)
檀一雄『リツ子・その愛』『リツ子・その死』1950(昭和25)年4月 作品社
檀一雄『真説石川五右衛門』1951(昭和26)年9月 新潮社
檀一雄「微笑」(『火宅の人』第1章)原稿(複製)
檀一雄『火宅の人』特装本 1979(昭和54)年6月 新潮社
映画「火宅の人」パンフレット 1986(昭和61)年 東映
檀一雄『檀流クッキング』1970(昭和45)年7月 サンケイ新聞社
檀一雄「おめぎの要る男」原稿
檀一雄「恋と吹雪と砲弾」草稿
檀一雄「わが顛落」原稿

山本周五郎(やまもと しゅうごろう)

写真パネル 秋山青磁 撮影 書斎 間門園にて

写真パネル 秋山青磁 撮影 1936 (昭和11) 年正月に馬込の自宅前にて
写真パネル 林忠彦 撮影 浦安時代
映画「ひとごろし」ポスター
山本周五郎「夏草戦記」原稿 (複製)
山本周五郎『夏草戦記』1945 (昭和20) 年3月 八雲書店
山本周五郎「青べか物語」原稿 (複製)
山本周五郎『山彦乙女』1952 (昭和27) 年2月 朝日新聞社
山本周五郎『甲州小説集』1974 (昭和49) 年8月 実業之日本社
山本周五郎『季節のない街』1962 (昭和37) 年12月 文藝春秋新社
山本周五郎 初期習作草稿 (複製) (清水きよし「酔漢とその細君」、清水紅情「寂しさ」、
清水清「或る男女の話」、村上幽鬼「染血桜田門外」草稿 (複製)
「どですかでん」パンフレット 1970 (昭和45) 年 東宝
山本周五郎『赤ひげ診療譚』1959 (昭和34) 年2月 文藝春秋新社
映画「赤ひげ」パンフレット 1965 (昭和40) 年 東宝
山本周五郎『さぶ』1963 (昭和38) 年8月 新潮社
舞台「さぶ」パンフレット 2003 (平成15) 年 新橋演舞場

深沢七郎 (ふかさわ しちろう)

写真パネル ギターリストの頃
写真パネル 1976 (昭和51) 年4月6日 石和の甲運亭にて
写真パネル 夢屋にて 撮影 佐藤真樹
映画「榎山節考」ポスター 1983 (昭和58) 年
深沢七郎選集出版記念ギターリサイタル ポスター 1968 (昭和43) 年
深沢七郎「榎山節考」原稿 (複製)
映画「榎山節考」プログラム 1958 (昭和33) 年4月 松竹
深沢七郎『榎山節考』1957 (昭和32) 年2月 中央公論社
深沢七郎「笛吹川」草稿 (複製)
深沢七郎『笛吹川』1958 (昭和33) 年4月 中央公論社
映画「笛吹川」パンフレット 1960 (昭和35) 年
深沢七郎『甲州子守唄』1965 (昭和40) 年3月 講談社
深沢七郎「言わなければよかったのに日記」原稿 (複製)
深沢七郎『言わなければよかったのに日記』1968 (昭和43) 年3月
深沢七郎 川久保正郎宛葉書 1966 (昭和41) 年1月8日
深沢七郎 川久保正郎宛葉書 1956 (昭和31) 年10月9日
深沢七郎 川久保正郎宛葉書 1961 (昭和36) 年8月15日
深沢七郎 小林富司夫宛葉書 1957 (昭和32) 年12月14日
深沢七郎「舞台再訪」原稿
今川焼屋「夢屋」包装紙

山崎方代 (やまざき ほうだい)

写真パネル 撮影 湯川晃敏
方代愛用の品 眼鏡 万年筆 文鎮 太筆
山崎方代「不二が笑つてゐる石が笑つてゐる笛吹川がつぶやいてゐる」軸装
山崎方代「折から甲斐路の春は深く天まで桃の花盛りなり」額装
山崎方代「丸出しの甲州弁で申します花は死であり死も花である」額装
山崎方代「ゆえ知らぬ涙は下る朝の陽が茶碗の中のめしを照せり」色紙
山崎方代「ひと片のさくらの花が流れ来て黒き机の上にとまれり」短冊
山崎方代「春を待つてる」草稿
山崎方代「右左口路」軸装
山崎方代「水晶の青い峠の頂きになんぢゃもんぢの木が立ってゐる」軸装
山崎方代「ゆえ知らぬ涙は下る朝の陽が茶碗の中のめしを照せり」短冊

山崎方代「まつ黒くすみたる馬の目の中に釜無川が流れている」短冊
山崎方代「大きな波が寄せて来る大きな笑いが笑い出したり」短冊
山崎方代「しのゝめの下界に降りて来た時石の笑いを耳にはさみぬ」短冊
山崎方代「ふるさとの右左口邨は骨壺の底にゆられて吾が帰る村」軸装
山崎方代「すりばちの底の方より太陽が燈を付けて上つて来る」軸装
山崎方代「わが歌の秘密」草稿（複製）
山崎方代「牧丘町 不二が笑つてゐる石が笑つてゐる笛吹川がつぶやいてゐる」軸装
山崎方代「そこだけがたそがれていて一本の指が歩いてゆくではないか」額装
山崎方代「茶碗の底に梅干の種が二つ並びをるこれが愛といふものなのだ」短冊
山崎方代「しろたえの野菊の花のはなびらの花びらの張りのはりのもどかし」短冊
山崎方代「とし月のさわさりながらさわあれどおしたい申しており候よ」色紙
山崎方代「土びんの話」草稿
山崎方代『方代』1955（昭和30）年10月 山上社
山崎方代『右左口』
山崎方代『こおろぎ』1980（昭和55）年11月 短歌新聞社
山崎方代『迦葉』1985（昭和60）年11月 不識書院
方代旧蔵『ヴィヨン詩鈔』（複製）

中村星湖（なかむら せいこ）

中村星湖「女のなか」原稿 複製
中村星湖『女のなか』1914（大正3）年10月 早稲田文学社
中村星湖「少年行」原稿（複製）
中村星湖『少年行』1947（昭和22）年3月 塙書房
中村星湖 訳『ボワリ夫人』1916（大正5）年6月 早稲田大学出版会
坪内逍遙 中村星湖宛書簡 1928（昭和3）年8月28日
柳田国男 中村星湖宛書簡 1943（昭和18）年8月30日

前田 晁（まえだ あきら）

田山花袋筆「文章世界」創刊号立案（複製）
小出楯重画「文章世界」第15巻第11号表紙原画 1920（大正9）年11月（複製）
前田晁『明治大正の文学人』1942（昭和17）4月 砂子屋書房
コナン・ドイル作 前田晁訳「三代目」原稿
窪田空穂 前田晁宛書簡 1926（大正15）年7月21日
坪内逍遙 中村星湖宛書簡 1928（昭和3）年8月28日
島崎藤村 前田晁宛葉書 1913（大正2）年9月3日
前田晁「『文章世界』と私」原稿

三井甲之（みつい こうし）

愛用品 筆立て・インキ壺
三井甲子「うつりやすきこのよのたのしみうたにうたひとはにかたみとせむはたのしき」短冊
三井甲子「ふる雪にうづみて見えぬ伏屋にも隣にかよふ道はありけり」短冊
三井甲子「アカネ」創刊号広告原稿
三井甲子「詩壇漫言」草稿
伊藤左千夫 三井甲之宛書簡 1905（明治38）年（推定）11月21日
長塚節 三井甲之宛書簡 1908（明治41）年（推定）1月8日（複製）
三井甲子「友に 海の波よせてはかへすと思ふよりもよせてはかへすうねりを見たまへ」短冊
「アカネ」1巻1号目次 草稿
三井甲子「大須賀乙字の追憶」原稿
三井甲子「自然ノ威力ニ死スルワレモマタ自然ナリ」短冊
「アカネ」第2巻第4号 1909（明治42）年5月

中里介山（なかざと かいざん）と山梨

- 中里介山「大菩薩峠」（白骨の巻）原稿〈複製〉原本 日本近代文学館蔵
中里介山「大菩薩峠」（流転の巻）原稿〈複製〉原本 日本近代文学館蔵
中里介山『大菩薩峠 鈴鹿山の巻』第1冊 第1巻・第2巻 1921（大正10）年5月 春秋社
「大菩薩峠」パンフレット 1949（昭和24）年 有楽座
「隣人之友」第15号 1927（昭和2）年12月
安岡章太郎「果てもない道中記」原稿 第3回
中里介山 後閑林平宛葉書 1922（大正11）年9月3日
中里介山 後閑林平宛葉書 1923（大正12）年1月1日

伊藤左千夫（いとう さちお）と山梨の歌人たち

- 「馬酔木」第3巻第2号 1906（明治39）年2月
「アカネ」第1巻第4号〈復刻〉1908（明治41）年6月
「アラゝギ」第2巻第1号 1909（明治42）年9月
伊藤左千夫 岡千里宛葉書 1906（明治39）年5月25日消印
伊藤左千夫 岡千里宛葉書 1906（明治39）年9月22日
伊藤左千夫 岡千里宛葉書 1907（明治40）年6月27日
伊藤左千夫「よもつくにの道の長手をよろつたひかへりみすらむ旅の子ゆへに」短冊
伊藤左千夫「敷妙の家のうちとの物みなのおよきにきほひ咲ける花かも」短冊
岡千里「糸さくら風にちりつゝくれなゐのつばきはいたみたままたまにおつ」短冊
岡千里「見てあれば地上にひたと落椿花われわれに玉の緒と絶ゆ」短冊
岡千里「木末より一輪落ちて花くずのくれなゐ叫び動きたるかも」短冊
岡千里「落椿みだれて赤き花屑に日輪黒くはめてある如し」短冊
神奈桃村「岩窟に安置されたる百体の石の看音見てまわりけり」短冊
神奈桃村「紫芋をかこひ穴よりとりだし芽あるとなきを選びわけるかも」短冊
神奈桃村 日記 第1号 1906（明治39）年
神奈桃村「岩窟のおくまるところ真かゝやく黄金の像一寸八分」短冊
神奈桃村 岡千里宛葉書 1910（明治43）年1月3日消印
日原無限ほか「地方歌会 甲斐楓会（題 苔）」原稿
日原無限「時雨空霽れなむとする雲の色彼の雲の色よ君が心に」一枚物
日原無限「真鏡と空澄渡りはらはらと木の葉を拂う初冬の風」短冊
日原無限 歌稿

秋山秋紅蓼（あきやま しゅうこうりょう）

- 秋山秋紅蓼「ぶどうの房」句稿
秋山秋紅蓼『兵隊と桜』1940（昭和15）年1月 沙羅書店
秋山秋紅蓼「俳句四格調の説」原稿〈複製〉
秋山秋紅蓼「於大野寺」スケッチ
秋山秋紅蓼「チュリップ」原稿
秋山秋紅蓼「蓮」句稿
秋山秋紅蓼「応物写形譜」其ノ一
秋山秋紅蓼「ぶどうの房」句稿
秋山秋紅蓼「葡萄」スケッチ
秋山秋紅蓼「炭火」句稿
秋山秋紅蓼「柘榴」スケッチ 一枚物

田中冬二（たなか ふゆじ）と山梨

- 田中冬二『青い夜道』1929（昭和4）年12月 第一書房
田中冬二 深沢正志宛書簡 1964（昭和39）年4月9日〈複製〉
田中冬二「香水の人を忘れず軽井沢」短冊
田中冬二「とっておきの話」草稿

田中冬二「山が近いのでいろいろの小鳥が来た」色紙
田中冬二「誘蛾燈に雨あし太くみゆるかな」短冊
田中冬二「秋」原稿
田中冬二「柿の葉かげし水冷やか鮓をおす」短冊
田中冬二「本栖村」色紙
田中冬二「浴泉記」原稿
佐藤惣之助 田中冬二宛書簡 1929（昭和4）年12月23日
落款印影

木々高太郎（きぎ たかたろう）

木々高太郎「ねむり妻」原稿
「新青年」第16巻第2号 1935（昭和10）年2月
木々高太郎『眠り人形』1935（昭和10）年4月 春秋社
「シュピオ」第3巻第4号 1937（昭和12）年5月
木々高太郎「美の悲劇」原稿〈複製〉
小栗虫太郎 木々高太郎宛書簡 1935（昭和10）年5月15日
木々高太郎「殺人鬼に罫をかける」原稿
林麟「文学に於ける実感に就て」原稿
木々高太郎『笛吹』1948（昭和23）年3月 世界社

小尾十三（おび じゅうぞう）

「文藝春秋」第22巻第12号 1944（昭和19）年12月
芥川賞記念品の腕時計
小尾十三『雑巾先生』1945（昭和20）年2月 満洲文藝春秋社
川端康成 小尾十三宛書簡 1951（昭和26）年5月9日
小尾十三「母への反抗時代」原稿〈複製〉
小尾十三「青き大麦島にて」原稿
小尾十三 俳句・短歌草稿
小尾十三「燈火」草稿

村岡花子（むらおか はなこ）

村岡花子『赤毛のアン』第5章翻訳原稿〈複製〉
モンゴメリ『ANNE OF GREEN GABLES』〈複製〉
映画「赤毛のアン」パンフレット 1986（昭和61）年 カナダ映画
村岡花子『随筆集 心の饗宴』1941（昭和16）年4月 時代社
村岡花子「随筆の生まれるとき」原稿
村岡花子「弁天池-K夫人のことどもー」原稿
村岡花子「クリスマスのおもいで」原稿

徳永寿美子（とくなが すみこ）

徳永寿美子「小公子」原稿〈複製〉
徳永寿美子『小公子』1948（昭和23）年5月 広島図書
徳永寿美子『小公子』1948（昭和23）年5月 広島図書
徳永寿美子『フランダースの犬』1965（昭和40）年12月 盛光社
「母」第6年第8号 1920（大正9）年8月〈複製〉原本 成蹊学園学園史料室蔵
徳永寿美子『薔薇の踊り子』1921（大正10）年2月 アルス〈複製〉
徳永寿美子「春の歌」詩草稿
徳永寿美子「茂ちゃんのしっぱい」草稿
徳永寿美子「甲斐のくに七里が岩のいわつつじあやに咲きけりう月のまひる」短冊
徳永寿美子「子供と童話」草稿
徳永寿美子「さむいさむいあさです」草稿

八木義徳（やぎ よしのり）と山梨

八木義徳「甲州と私」原稿
『満洲観光聯盟報』第5巻第6号 1941（昭和16）年6月
八木義徳『母子鎮魂』1948（昭和23）年3月 世界社
八木義徳「花盛りの一日」原稿
八木義徳「灰色の海に」色紙
八木義徳「胡桃」原稿
『八木義徳全集』第1巻 1990（平成2）年3月 福武書店
『八木義徳全集』第4巻 1990（平成2）年6月 福武書店

武田泰淳（たけだ たいじゅん）と山梨

司修『富士』挿絵原画 エッチング
武田泰淳『富士』1971（昭和46）年11月 中央公論社
『海』第1巻第5号 1969（昭和44）年10月
武田泰淳「わが子キリスト」原稿〈複製〉原本 日本近代文学館蔵
武田泰淳「小事」原稿
武田泰淳「L恐怖症」原稿
司修『富士』挿絵原画エッチング

李良枝（イ・ヤンジ）

李良枝「由熙へ」草稿
『文藝春秋』1989（平成元）年3月
李良枝『由熙』1989（平成元）年2月 講談社
芥川賞正賞の記念品
愛用の筆筒、文具類
李良枝「かずきめ」草稿
李良枝「富士山」原稿コピー
李良枝「私の『ゲーテとの対話』」草稿

辻 邦生（つじ くにお）と山梨

『海』創刊特大号 1969（昭和44）年7月
辻邦生『銀杏散りやまず』1989（平成元）年9月 新潮社
辻邦生「モノオペラ銀杏散りやまず」パンフレット
辻邦生「埴谷雄高氏との出会い」原稿
辻邦生「ある生涯の七つの場所」原稿
辻邦生 高室陽二郎宛書簡 1989（平成元）年11月4日
辻邦生「含羞のエロス」原稿

第3室 芥川龍之介

【大川の水（誕生・少年期）】

伯母のふきが使った長唄稽古本
「牛乳の用法」パンフレット 1904（明治37）年11月 耕牧舎
芥川龍之介「義仲論」原稿

【空中の火花（文壇登場）】

菅虎雄筆「我鬼窟」扁額〈複製〉
芥川龍之介「鼻」ノート
芥川龍之介「鼻」草稿「新思潮」1916（大正5）年2月掲載〈複製〉

「新思潮」創刊号 1916（大正5）年2月
芥川龍之介「葬儀の記」原稿〈複製〉
芥川龍之介「秋」草稿
芥川龍之介『傀儡師』1919（大正8）年1月 新潮社
芥川龍之介『点心』1923（大正11）年5月 金星堂
芥川龍之介『支那遊記』1925（大正14）年11月 改造社
芥川龍之介〈玄鶴山房〉草稿

【ぼんやりした不安（苦悩と死）】

芥川龍之介筆「澄江堂十首」卷子〈複製〉原本 天理大学附属天理図書館蔵
『近代日本文藝読本』全5巻 1925（大正14）年11月 興文社
芥川龍之介『湖南の扇』1927（昭和2）年6月 文藝春秋社出版部
芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な」原稿「改造」1927（昭和2）年4月掲載〈複製〉
芥川龍之介「或阿呆の一生」原稿「改造」1927（昭和2）年10月掲載〈複製〉

【書画の魅力】

芥川龍之介画・筆「抱虚懐欲歩古今」
芥川龍之介 小穴隆一宛書簡軸装 1922（大正11）年7月9日
「野茨にからまる萩のさかりかな」色紙
「新むろの畳すがしみわがをれば」軸装
素描「もろこし」
水彩画 1909（明治42）年、1910（明治43）年

【芥川の俳句】

「牛に積む御料楡や梅の花」ほか俳句草稿
「春雨や霜に焦げたる杉ながら」ほか俳句草稿
「日もすがら海鳴る音や麦の秋」ほか俳句草稿
「金を練る籠も古りて蚊食鳥」ほか俳句草稿
「麦あらしすさびそめけり暮れにけり」ほか俳句草稿
「蝙蝠や灯入りの月に人ふたり」ほか俳句草稿
「舟牢にからむ藻草や蚊食鳥」ほか俳句草稿
「炎天や蝶をとめたる馬の糞」ほか俳句草稿
「巻煙草けむりの垂るる夜長かな」他俳句草稿
「紙巻の煙の垂るる夜長かな」他俳句草稿
「いく秋をふる盃や酒のいろ」俳句草稿
「はつ時雨ありとも見えぬ飛行機や」俳句草稿
「町かどや入り日片照るひと茂り」俳句草稿
「盆梅の枝にかかるや梅のひげ」俳句草稿
「ホトトギス」1918（大正7）年9月
「ホトトギス」1919（大正8）年3月
芥川龍之介『梅・馬・鶯』1926（大正15）年12月 新潮社〈復刻〉
「雲母」1927（昭和2）年9月号
『澄江堂句集』1927（昭和2）年12月 文藝春秋社

【芥川と山梨】

芥川龍之介「藤の花軒端の苔の老いにけり」幅〈複製〉
芥川龍之介「水虎晚歸之図」額〈複製〉
芥川龍之介 山本喜誉司宛書簡 1910（明治43）年10月14日〈複製〉
芥川龍之介 山梨夏期大学講演メモ〈複製〉

【羅生門】

「羅生門」関連ノート〈複製〉
芥川龍之介『羅生門』1917（大正6）年5月 阿蘭陀書房〈復刻〉
芥川龍之介『鼻』1918（大正7）年7月 春陽堂〈復刻〉